

【②見方や考え方について－E：その他】

■子どもとかかわる接点、宝を手放してはならない

図工・美術科の授業時数が少なくなって久しい。つくること、見
ることを原点とする教科の担うものは大きい。

子どもは図工が好きである。ある調査によれば、体育に続いて好
きな教科としてあげられる。

一旦つくることにかかると夢中になる。つくる・描くことのす
ばらしさを楽しみ、味わうことができる。

実生活では、ものをつくることが少なくなってきている。つくる
よりも既製品のほうが、小綺麗で安い。時間もかからない。つくる
ことによるゴミも汚れも出ない。すべてこの調子で片づけられてし
まっている。

子どものつくるものは奥が深い。意味がある。心の叫びがある。
どれも同じものがない。そのよさを認められない大人になっていな
いだろうか。

子どものつくったものは、家に持ち帰られ、どのように扱われて
いるだろうか。しばらく飾る、写真に撮り、アルバムに貼り、コメ
ントをつけるなどの工夫も必要である。最もわかりやすく、簡単に
子どもとの接点をもつ絶好の機会を逃していないだろうか。

学校では子どものつくったものを飾り、よさを認め合う場がある
が、その場と時間さえ危うくなってきている。

高齢化社会に移行する中、生涯学習とのかかわりや日常的に創造
活動とかかわるといふ観点で、図工・美術科教育をとらえ直したい。
見て、つくり、描くことは、考えることである。この宝を手放して
はならない。

いけがみひでとし

(池上秀敏：新潟県上越市立稲田小学校校長)